

# ふくい ユーミアム

2013.3.15 No.46

平成25年度文化財公開展

## 福井の面とまつり

福井県は、優れた面打ちの多く出た地域です。世阿弥による『さるがくだんぎ申楽談義』には、越前に住む面打ちの名が挙げられています。また、世阿弥の時代以降も平泉寺三光坊、世襲面打ちである出目家などを輩出しています。こうした名を残した面打ちの手によるものだけでなく、古い面の残る寺社も多くあります。これらには、白山信仰を背景とした芸能があったからともいわれており、現在でも大半の面は祭りで使われています。

今回の展示では、そうした面と面の関わる祭りを紹介し、福井の面と人との関わりのも多様性に興味や関心を深めていただけたらと考えています。

### 一、面・神となる 一神の面一

面とは、人が神霊や鬼などになる、つまり、人とは異なる存在になるための道具の一つです。面がいつ頃から生まれたのかは分かりませんが、縄文時代の遺跡からも発掘されており、長い歴史を持つと言えます。

縄文時代の面は、祭祀に使われたのではないかと考えられています。面はそのように祭祀、すなわち祭り、神への祈りを捧げるために生まれたものと考えられてきました。面を着けることで神を演じ、また、面を着けて舞い踊る芸能などを神に捧げてきたのです。面は、

そうした祭りのための道具の一つであったはずですが、いつの間にか面そのものが神そのものだとされている場合があります。当然のことながら、道具の一つだと言っても、そもそも面を用いて神の代わりを演じるわけですから、神に準じた扱いをされてきたわけです。しかし、何らかの理由で、祭りはなくなり、そこで行われていた芸能もなくなり、神を演じていた面だけが残されることもあります。そして、それがいつの間にか神聖視されていったもの、いわば「神様」となった面があります。特に福井の面は、白山信仰と密接に関わっています。白山の神そのものだとする面もあります。

### 二、人・神となる 一神楽面と獅子頭一

神楽とは、元々招魂、鎮魂を行うために行われたものです。分類の仕方も多くありますが、神楽は採物とりもの神楽、獅子神楽、湯立ゆたて神楽、巫女みこ神楽の4つに分けて考えることができます。一つの祭りの中では、これらが混ざり合って構成されていますが、福井県内にはこれまでの報告から採物神楽、獅子神楽に分類されるものが広く分布することが知られており、特に今回は、面を着けて舞う採物神楽、獅子神楽を紹介します。



馬鹿ばやしの面





採物神楽とは、採物といわれる手に持つ道具、例えば、刀や鈴などを持って舞う神楽のことを指します。福井での採物神楽の特に有名なものとはいうと、坂井市丸岡町長畝の長畝日向神楽がこれにあたります。この日向神楽は、江戸時代に丸岡藩主となった有馬氏が日向（現在の宮崎県）から、この神楽の舞手を連れてきたことにより、伝わったものです。江戸時代の間は、日向の人々によって伝えられてきましたが、現在は長畝の人たちにより傳承されているものです。今回はこちらをご紹介します。

獅子神楽は、その名の通り、獅子が出てくる、獅子頭を使って舞う神楽のことです。獅子頭も面の一種といえます。県内では、神楽と言えば獅子神楽と言っても過言ではないと思われるほど多く分布しています。現在では過疎化などの影響により、舞われなくなったというところもありますが、特に越前海岸では、9月から11月の秋の祭りで盛んに舞われています。県内の獅子神楽は、特に伊勢太神楽の影響を強く受けていると思われます。伊勢に行って習ってきたものだ、という傳承などからもそれを窺うことができます。そうした獅子神楽を紹介します。

また、獅子頭を使うのは神楽だけに限りません。獅子頭は元来、伎楽で用いられ、先払いをする役目でした。現在でもその役目を持たされている場合も多いのですが、長い時間の中で変遷していくものもありました。その変遷の中で、獅子頭そのものを神と捉えているかの

ような事例もあります。そのような獅子頭も紹介します。

### 三、人・演じる

面を着け、舞うものは神霊や鬼など人とは異なる、特異な力を持ったものになることが主でしたが、そのうち、単純に人を演じることも出てきました。こうした祭りでは多種多様な面が使われることがあります。

福井市手寄では馬鹿ばやしが傳承されています。この馬鹿ばやしは江戸時代に始まったもので、現在、37面が残されています。数も多く、優れた面打ちによる面も含まれ、能面や狂言面などが入り乱れて使われています。ユニークさは他に例を見ないのではないのでしょうか。このような様々な面を使う多様性を含めて、紹介します。

(川波久志)



妙泰寺七福神祭り(明神会)



長畝日向神楽



馬鹿ばやし

企画展「福井の面とまつり」 平成25年7月19日(金)～9月1日(日)

《観覧料》一般400円 大学・高校生300円 小中学生200円 70歳以上の方200円



# 橘家文書・ 夢楽人万司直筆和歌二首

[法 量] 短冊:縦 35.7cm×横 6.8cm  
色紙:縦 17.5cm×横 17.5cm  
[年 代] 明和2年(1765)7月

最近、新たに確認された史料を紹介します。まず写真をご覧下さい。写真1は「我酔た」という題の一首が書かれた短冊、写真2は「行水に」から始まる無題の一首が書かれた色紙で、どちらも明和2年(1765)7月に詠まれたものです。一見、ありふれた江戸時代の和歌であるかのように思えますが、作品としての評価はとりあえず置くこととして、注目したいのはこれらの和歌を詠んだ作者です。それぞれの落款を見ると、写真1には「夢楽人万司」、写真2には「万司」と記されており、「夢楽人」「三光堂」といった印が添えられていることに気づきます。

この万司という人物は、18世紀後半の越前で活躍した雑俳(民衆の間に流行した娯楽俳諧)興行の点者(評価者)で、多くの弟子を抱え、自らを「夢楽人万司」あるいは「万司仙人」と号していました。万司に關係するほぼ唯一の古文書によれば、本名は万屋曾平、福井城下町の北陸道に面した小田原町(現在の福井市田原1・2丁目付近)に一家5人で住み、明和2年時点で31才でした。万司が点者をつとめた雑俳興行の句額が、県内4ヶ所の神社に奉納されています。また、明和8年ごろからは絵馬の絵師として活動し、のちの絵馬屋・夢楽洞の初代となったことが、県内外各地の神社に奉納された数多くの絵馬から確認されています。

福井の歴史のなかで万司の名が

知られるようになったのは、じつはここ20年のことです。当館が1991～93年にかけて行った県内の絵馬の所在調査がそのきっかけで、これまで2度の展覧会を開催しました。しかし、絵馬や句額以外の史料はほとんど残っておらず、いまだ謎の多い人物です。その意味で、これらの和歌は夢楽人万司直筆の貴重な史料だといえます。

もうひとつ注目したい点は、<sup>はしうらがき</sup>端裏書に「宗賢様」と記されていることです。このことから、これらの和歌は夢楽人万司が「宗賢様」、すなわち<sup>たばなそうけん</sup>橘宗賢という人物のために詠んだものということになります。

橘宗賢とは、戦国期北庄の有力商人だった橘屋の直系の子孫の名前です。伝来の家業である薬屋を営みつつ、町医者も兼業し、明和2年時点で47才でした。彼は書画や詩歌に通じ、福井藩の儒学者らとも親交を結び、福井城下町のなかでも有数の知識人・文化人でした。その一端は、彼が丹念に調べてまとめた家の系図や記録、日記類などが橘家文書のなかに多く残されていることからもうかがえます。

このように見てくると、紹介した二首の和歌の背景に、対照的な二人の交流が浮かび上がってきます。雑俳や絵馬といった民衆の文化のリーダーとして活躍した夢楽人万司。城下町の由緒ある商家に生まれ育った一流の知識人・文化人である橘宗賢。同時代を生きた二人の交流は、これまでまったく知られていなかった新事実であると同時に、福井城下町のさまざまな文化の担い手たちによる幅広いネットワークが存在していたことを物語っています。

(久角健二)



写真1

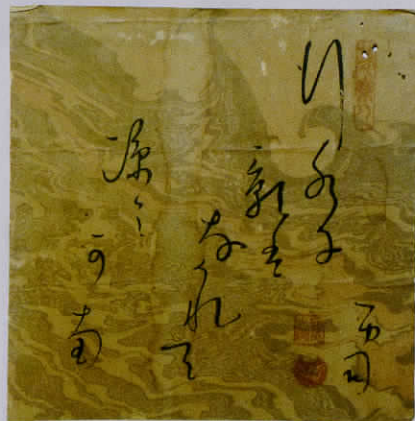
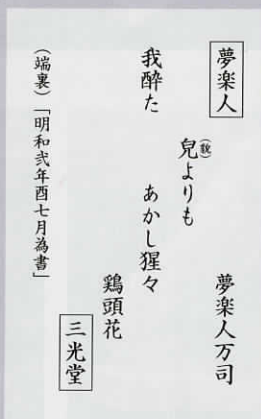
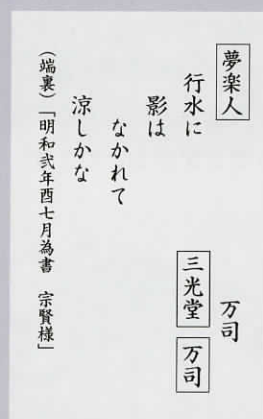


写真2





# 小型狛犬(17点)

[法 量] 高116mm(最大)  
 [製作時期] 江戸時代  
 [旧 蔵] 弁財天堂(福井市浄土寺町)

石造の小型狛犬です。すべて、福井市の北西部、七瀬川と九頭竜川の合流地点に近い浄土寺町の弁財天堂内に残されていたものです。弁財天堂は、丘陵地の裾にある山王神社近くにあり、平成4年(1993)に取り壊された際に、資料を当館で保管することになりました。今回紹介する小型狛犬は、その一部です。

さて、狛犬を見てみましょう。弁財天堂には、越前青石(笏谷石)製の「越前狛犬」(社殿内に置かれたと考えられます)が複数残されていました。高さ23cmの狛犬が2対、28cmのものが1対あり、これらについては、銘文はありませんが形からは江戸時代の初期から中期にかけて作られたものと考えられます。そして、今回紹介する小型狛犬は、完形が17点、破片が8点となっています。

これら小型狛犬たちのサイズを見ると、高さは約6～12cmの範囲に収まっています。このくらいの大きさの狛犬は、嶺北各地で数多く残され、ひとつの神社やお堂で数十点も見つかることも珍しくありません。それこそ着物のたもとや懐に入れて持ち帰ることができる大きさ・重さであり、おそらくは安価でもあったでしょうから、一般の人たちによって奉納されたと考えられます。造形は素朴で、阿吽の区別も明確ではなく、製作時に必ず一対を意識したかどうか定かではありません。とはいえ、2体(一対)がセットで彫られている例も見つかっていることから(福井市西河原町)、「狛犬」として彫られたことは確かです。

しかし、これらの小型狛犬については、今のところ詳細が分かりません。奉納の年号が彫られたり書かれたりすることがほとんどなく、奉納や製作の年代が不明であること、造形が素朴であるため、その変化から年代を追うことが難しいのです。ひとつの神社

に多数の小型狛犬があったとして、それが短い期間に大量に奉納された「小型狛犬ブーム」の結果なのか、それとも、数十年かけて少しずつ奉納されて数が増えたのかが分からない点も問題です。

それでも、小型狛犬の造形に手がかりがあるはずで、今回の一括資料も、大きく2つのタイプに分かれています。うち、Aタイプ(写真2・1点)はたてがみが作られ、頭部と胴部が明確に角度を変えて彫られています。背はゆるやかな弧を描く点で他の16点とは異なります。残り16点は、頭から背中、尻までが一直線にされています。これをBタイプとします。Bタイプはさらに、前脚と胴部が彫りぬかれているもの(写真3・B-1:5点)と、彫りぬかれないもの(写真4・B-2:11点)の2群に分けられます。製作時の手間から言えば、A⇒B-1⇒B-2の順に簡略化が進んだとも見えます。この順序は、製作年代の古い順とも予測できます。ほかにも、目の形や台座の形などのデータを整理することで、造形から小型狛犬の製作時期や奉納の形態について明らかにしていければと思います。

(瓜生由起)



写真1



写真2 (Aタイプ:高93mm)



写真3 (B-1タイプ:高85mm)



写真4 (B-2タイプ:高76mm)



## 竹下善一氏の写真アルバム

勝山市 竹下明氏寄託

昭和3年(1928)、福井県ではじめての百貨店「だるま屋」が開設されました。今回紹介する資料は、その設立メンバーの一人であった竹下善一氏の写真アルバムです。

だるま屋の創業者である坪川信一は、元教員という異色の経歴を持つ人物であったことが知られていますが、創業当時の営業部長をはじめとする各部長もすべて元教員でした。その中の一人、竹下善一もまた県立高等女学校の元教諭で、だるま屋百貨店の意匠部長という役職にありました。

この写真アルバムは全部で12冊あり、昭和3年から42年頃までの家族や旅行の写真など1100枚余の写真が収められています。そのうちの180枚余がだるま屋関係の写真です。全景や店内、坪川店長や店員など、実にさまざまな写真があり、創業当時のだるま屋の歴史をビジュアルに伝えてくれる貴重な資料といえます。

その中からいくつかを紹介しましょう。まず、全景写真です。創業時は木造2階建てでしたが、3年後に3階部分に食堂、4階に遊技場「コドモの国」が増設されました。写真1は、その増設部分が見えるように写したものです。隣接する建物の屋上から撮影されたものと思われる。全景写真の多くは地上から撮影された正面写真が知られていますが、3・4階部分も含めたものは、これまで知られていません。ちなみに、アルバムには「四階のだるま屋全景」というタイトルが書かれています。全景写真はこのほかにも、福井震災後わずか1か月で再開業した時のもの、そして昭和28年3月に完成した鉄筋コンクリート3階建ての新館などがあります。

次に、店内売場の写真です。だるま屋は、当初から子どもをターゲットとした売場を設置しました。1階には、「コドモ百貨部」が設けられ、玩具や文房具、運動用具など子どもに関連する商品が並んでいました。写真2は、その売場を写したものです。天井には日の丸の旗が飾られ、「玩具売場」の看板の下には、ひな壇に数多くのおもちゃが所狭しと並べられている様子を見ることが出来ます。これ以外にも陶器売場や水着売場など、工夫を凝らした店内売場の写真もいくつか見られます。

続いて、ショーウィンドーの写真です。正面入口の左右には2つのショーウィンドーがあり、季節や催事に応じて趣向を凝らしたディスプレイは、通りを行き交う人びとの目を楽しませた

ことでしょう。写真3は、開店最初のウィンドーです。着物姿の婦人を中央に、左手に洋装の親子が配置されています。このほか、野球や



写真2

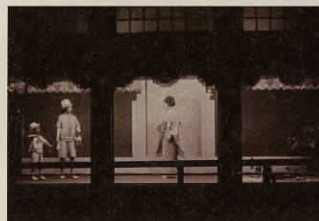


写真3



写真4

テニスなどのスポーツ商品、あるいはスキー用品などを紹介したディスプレイを含め、創業当時のショーウィンドーの写真10枚が収められています。これらのショーウィンドーの企画は、意匠部長であった竹下善一によるものと思われます。

このほか、毎年夏に店員全員の慰安を目的の海水浴での集合写真やだるま屋野球部の試合観戦など、店外での写真も収められています。写真4は、その中の一つで、戦災・震災からの復興を祝して催されることになった「福井まつり」に登場した際の、仮装行列の写真です。昭和29年8月に第1回の祭りがおこなわれ、ダルマの顔をかたどった面をかぶった店員たちの行列と、その後ろをダルマ人形のみこしが行進する姿を写したものです。このユニークな姿は、市民の注目を浴びるとともに、だるま屋百貨店の大きな宣伝になったものと思われます。

ここではすべてを紹介することはできませんが、このほかにも「だるま屋少女歌劇」や「コドモの国」と称された子ども向けの遊技場、催事場でおこなわれた「菊人形展」「スキー展」などがあり、創業当時から戦後にかけてのだるま屋の姿が数多くの写真をとおして、よみがえってきます。こうしてみると、アルバムの持ち主であった竹下氏は、意匠部長という役職であったからこそ、だるま屋百貨店の姿を記録にとどめようとしたのではないのでしょうか。

(山形裕之)



写真1



# 初期神像に見る神仏習合

泰澄寺所蔵僧形坐像(伝泰澄大師像)を例として

近年「神仏習合」ということばが多く聞かれます。特に各地の博物館等でも「神と仏の…」というタイトルの展覧会を目にするのも多いのではないのでしょうか。福井県でも古代からの仏教文化を考える時、避けて通れないのが「神仏習合」です。では「神仏習合とはなにか?」また、「その思想を仏・神像等の中でどのように表現したか?」についてみてゆきたいと思います。

## 一、「神仏習合思想」の流れ

まず、神仏習合思想の流れを簡単に追いかけてみましょう。古くから信仰されてきた「八百万」の神々は、自然をコントロールし、作物を<sup>やおよろず</sup>実らせ、人間の願いも聞く等さまざまな役割を果たすとされました。すると、神様でもストレスや悩みごとを抱え込むようになります。神が病にかかると人間の生活に影響が出るため、神の心と体の病を癒すために仏の教えを求めました(神身離脱)。そのために神社の一角に寺院(神宮寺)が置かれ、神のこころを慰めます。因みに文献上登場する最古の神宮寺は敦賀市の「氣比神宮寺」で、奈良時代<sup>れいまい</sup>霊亀元年(715)の建立とされます。更に進んで、いっそ神も出家し、仏道を修行すれば憂いから離れられることになり、さらに修行を積み<sup>ぼさつ</sup>菩薩の地位を得ると考えられるようになります。平安時代初め頃のことです。この例が<sup>そうぼうしんぞう</sup>僧形神像と呼ばれる一群で、とりわけ有名なのが大菩薩と称される八幡神です。端的に言えば悟りを得て成仏することで仏のパワーと神の超能力で2倍のパワーを得たということになるのでしょうか。

このような考え方は仏教側から出された理論と考えられますが、そもそも仏教がインドで成立した当初からバラモン教の神々が仏の教に感動し、仏教を信じ、擁護する(護法善神)と考えられました。仏像で毘沙門天や帝釈天などいわゆる天部に属する多くは、仏教に帰依したインドの神々です。そもそも仏教(大乘仏教)では動植物から人間、神に至るまで相応の苦しみがあるとされました。その苦を取り除いた者が「悟った存在=仏」とされたので、特定の絶対者が存在するわけはありません。つまり、仏教そのものに他を取り込む素地があったといえます。

神を仏教の信者とした神仏習合は、やがて独自の発展を遂げ、平安時代末期には「神様は仏様が日本人を救うために変身して現れた姿だ」という説がとえられ始めました(「本地垂迹説」)。ところでこの「仏=神」という考え方を受けて、神社の神殿内にも「神様」として仏像が祀られるようになります。その後、神社の宗教的な行事の運営を特定のお寺(別当寺)が受け持つようになり、神社にはお坊さんと神主さんの両方の姿が見られるのが一般的になります。こうして、「神仏習合」という信仰の形は、長く続いていきました。

それが覆されたのが、明治時代のことです。明治新政府は、国家神道の確立を目的に、「神仏分離令」を出して神社から仏教を取り除きました。その結果、多くの仏像や寺院が破壊されました。しかし、信仰心篤い人びとによって密かに守られた仏像もありました。福井県では平安時代頃の古仏の多くが神社伝来であることから、神仏習合(思想理解の有無に関わらず)の根強さがわかります。

## 二、初期神像の特色

日本の神々は本来姿の見えないもの、実体のないものとされてきました。逆にいえば変化し憑依して様々な姿で現れ、固定的な姿のない存在でした。この姿なき存在が神像として作られ始めたのは、現存例から9世紀頃と考えられます。京都市松尾大社三神像や奈良市薬師寺八幡三神像等が知られています。本来姿のない神が、神像として造られるようになったのは、単純に仏像に刺激され神像を造るようになったのではなく、神仏習合の流れの中で、神像に仏像特有のしるしを付加することで神が仏教に帰依し、更に悟りへと至ることを視覚的に表現したと考えられます。その様子を福井県を代表する初期神像の1つ、泰澄寺所蔵僧形坐像(伝泰澄大師像)で見てゆきましょう。

### ① 仏教的表現

まず、頭を丸め(剃髪)、袈裟衣を着けた僧形(a)は仏教者であることを示しています。首に彫刻されたしわ「三道(二道)」(c)は、悟りを得た人の目印とされる



はちじゅうしゅこう  
八十種好のひとつです。手足の上には衣を掛けて見えませんが、手は膝の上に置いていることから座禅の時に組む定印(e)と考えられます。又足は手の下で引き寄せられている事から座禅の結跏趺坐(g)であると考えられます。このように仏像と同じ特色を見せています。他像(例：越前市大虫神社 塩土神坐像)では長い耳(耳朶環状)も見られ、これも仏の特徴です。

## ②神的表现

一方神像は、その造形技法から仏像の工房で造られたとみられますが、神像の造像当初から仏とは違うという意識を持っていたと考えられます。神像の独自性を示すキーワードは「隠す」です。先の泰澄寺所蔵僧形坐像(伝泰澄大師坐像)で見てゆきましょう。まず着衣ですが、袈裟を着けた仏像は大抵胸の部分を大きく開いて裸体を曝します。しかし、泰澄寺像では胸元を隠すように袈裟を着けています(d)。また、先述の通り手足を衣で隠しています。仏の働きを礼拝者に示す上で最も大切な手印(今日的には手話というべきでしょうか)を隠す(f)のは仏像では考えられないことです。足も仏像なら大抵見せているにも関わらず泰澄寺像では隠しています(h)。有無がわからないくらい非常に浅く彫られた眼(b)もこの「隠す」表現に繋がるのかも知れません。

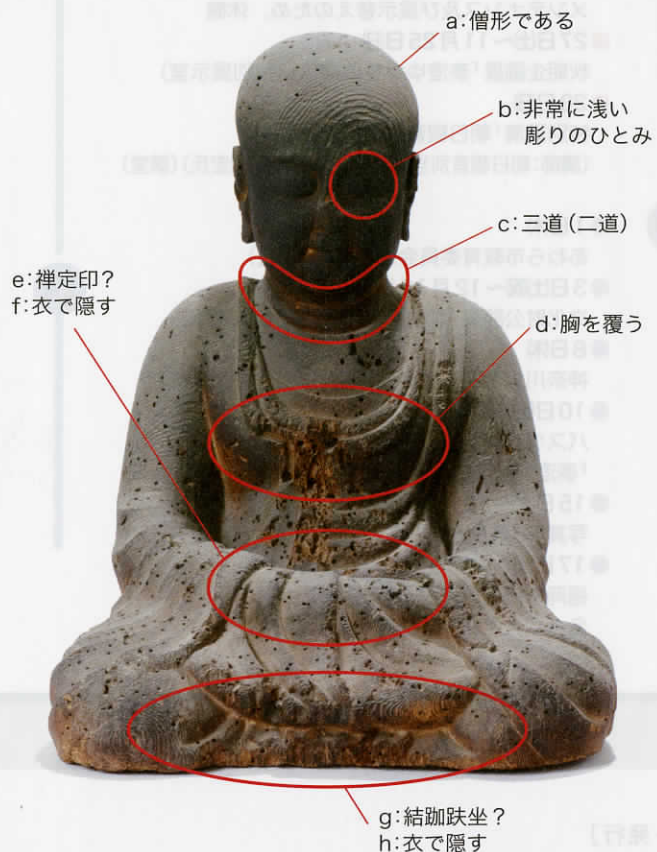
この他、初期の神像には仏像に比べ衣のしわが非常に少なく、意識的に仏像との違いを表したと考えられるものがあります。また、笏を持つもの(例：彦根市本隆寺 僧形神像)や拱手するのも仏像にはみられない神像の特色です。

以上、神像彫刻は仏像彫刻の技法に拠りながら当初から神像としての独自性を以て造像されました。しかし、仏教を信奉していること、さらに悟りへと至っていることを示すために仏・菩薩像の特色を点としてちりばめました。これが9世紀の半ばに登場した初期神像の造形コンセプトであったと考えられます。泰澄寺僧形像の特色は、手足を「隠す」ことにより神を表現すると同時に、隠した衣の内の手足の状態を推測させるという相反する両者を造形化した高い技術力が光ります。また、神・仏の思想面での充分な理解力に裏打ちされている非常に優れた像です。

## ③神像の安置環境

最後に、神像はどこに祀られたのでしょうか。文献資料の残る京都市松尾大社の三神像では、神社本殿ではなく神宮寺の仏堂内に祀られていたことが記されています。当時の開放的な仏堂空間の特色から神像はその姿を拝者に見せていたと考えられます。姿を見せることによって教えや利益を示すのは仏教的といえます。神像は閉ざされた神殿の奥に秘されるのではなく仏堂のような空間を前提としたため、神であること、仏教者であることをわかりやすく視覚的に盛り込む必要があったと考えられます。すべての神像が松尾大社像と同じではなく、神殿に秘された像も存在したと思われませんが、9世紀から10世紀初めに造像された初期神像の造形的特色を考える上で、安置環境の復元は重要なカギになると思います。

以上、初期神像は仏教側の思想に立脚し造形化されたことがわかりましたが、この流れは中央(都)から発信された神仏習合であると考えられます。しかし、このような中央からの神仏習合に対し、地方からの神仏習合も考えられます。その代表が「泰澄大師」といえるでしょう。地方からの神仏習合については別の機会といたしましょう。(河村健史)





9月

- 1日(出)  
福岡市博物館来館(資料貸出)
- 7日(金)～30日(日)  
写真展「冬のまつり 民俗行事の記録より」  
(エントランスギャラリー)
- 8日(土)～30日(日)  
新収資料紹介展「古地図—西洋から見た日本」  
(オープン収蔵庫)
- 10日(月)  
京都女子大学来館(館内見学(博物館実習))
- 10日(月)～14日(金)  
美術品取扱い研修(文化庁主催・於九州国立博物館)
- 19日(水)  
若狭歴史民俗資料館来館(資料調査)  
花園大学来館(館内見学(博物館実習))
- 21日(金)  
北名古屋博物館来館(資料貸出)
- 28日(金)  
安土城考古博物館(資料貸出)

10月

- 2日(火)～11月13日(火)  
写真展「福井国体・躍動の瞬間」  
(エントランスギャラリー)
- 7日(日)～28日(日)  
ミニ企画展「北庄と橘屋—橘家文書の世界—」  
(オープン収蔵庫)
- 10日(水)  
博物館運営協議会
- 12日(金)  
重要文化財公開承認施設会議(於文化庁)
- 24日(水)～26日(金)  
メンテナンス及び展示替えのため、休館
- 27日(土)～11月25日(日)  
秋期企画展「泰澄ゆかりの神仏」(特別展示室)
- 28日(日)  
特別講演「朝日観音ゆかりの仏像」  
(講師:朝日観音別当福通寺住職 藤川明宏氏)(講堂)

11月

- 1日(休)  
あわら市教育委員会来館(資料調査)
- 3日(土)～12月16日(日)  
文化財公開展「越前狛犬」(オープン収蔵庫)
- 8日(休)  
神奈川大学名誉教授河野通明氏来館(資料調査)
- 10日(土)  
バスツアー  
「泰澄開山の白山三馬場平泉寺と長滝寺を訪ねる」
- 15日(木)～12月11日(火)  
写真展「祭りと食」(エントランスギャラリー)
- 17日(土)  
福岡市博物館来館(資料返却)  
名古屋大学文学部来館(特別展見学)

11月

- 18日(日)  
「泰澄に手向けるお茶会」(エントランスロビー)
- 19日(月)  
東京文化財研究所来館(資料調査)
- 23日(金)  
バスツアー  
「平安の仏・菩薩を文殊山と越前町八坂神社を訪ねる」
- 26日(月)～28日(水)  
メンテナンス及び展示替えのため、休館
- 28日(水)  
あわら市教育委員会来館(資料調査)
- 29日(木)  
若狭歴史民俗資料館来館(資料返却)

12月

- 13日(水)～2月8日(金)  
写真展「ふくい左義長」(エントランスギャラリー)
- 14日(金)  
高野商店来館(資料調査)
- 19日(水)～1月27日(日)  
ミニ企画展「馬威」(オープン収蔵庫)
- 22日(土)～1月7日(月)  
「冬休み! れきはくクイズラリー」
- 23日(日)  
「クイズ&運だめし!? 福引大会」
- 29日(土)～1月2日(火)  
年末年始のため、休館

平成25年  
1月

- 3日(木)～2月24日(日)  
冬の收藏品展「干支と年賀状」(特別展示室)
- 6日(日)  
「クイズ&運だめし!? 福引大会」
- 13日(日)  
「はつはるのお茶会」
- 22日(火)  
一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館(資料貸出)
- 24日(木)  
福井市橘曙覧記念館来館(資料貸出)
- 26日(金)  
一般社団法人三國會所来館(資料調査)

2月

- 2日(土)～11日(祝)  
ミニ企画展「北庄と橘屋—橘家文書の世界—」  
(再展示・オープン収蔵庫)
- 10日(日)～3月3日(日)  
写真展「昭和の雛まつり」(エントランスギャラリー)
- 11日(月)  
青森県立埋蔵文化財センター来館(資料調査)
- 14日(木)～3月26日(火)  
収蔵資料展「蓄音機の世界」(オープン収蔵庫)